

多様性を意識した日本語と話者に対する理解が目指すもの
 –World Japaneses の議論をもとに–

WHAT ARE THE AIMS OF RAISING AWARENESS TOWARDS DIVERSITY IN
 JAPANESE LANGUAGE AND SPEAKERS?
 INSIGHTS FROM THE DISCUSSION ON WORLD JAPANESES

米本和弘, 東京医科歯科大学, 柴田智子, プリンストン大学
 津田麻美, コロンビア大学, 林寿子, サイモンフレーザー大学
 Kazuhiro Yonemoto, Tokyo Medical and Dental University,
 Tomoko Shibata, Princeton University, Asami Tsuda, Columbia University
 Hisako Hayashi, Simon Fraser University

共同研究者：川口真代, トロント大学
 Co-investigator: Mayo Kawaguchi, University of Toronto

1. はじめに

近年、社会の中の言語的・文化的多様性への認識が高まり、日本語教育分野においても、やさしい日本語（庵，2013）やトランスランゲージング（加納，2016）といった日本語話者の多様性やそれぞれの背景を反映した言語活動に対する理解、そして教育への応用の必要性が認識されつつある。そのような中で菅野（2014）は World Englishes（e.g., Jenkins, 2000; Kachru, 1985; Smith, 1983）の議論を基に「The monolingual, native-speaker model of Japanese may not be appropriate, or even relevant, to plurilingual learners of Japanese.」と述べ、World Japaneses という考え方の可能性を提示している。菅野（2014）が指摘している通り、英語教育分野とは異なり、日本語教育分野ではその教育だけではなく、言語や話者に対する批判的な検討もあくまでも母語話者を規範、基準として行われてきており、現実の多様性を十分に反映してきたとはいいがたいところがある。

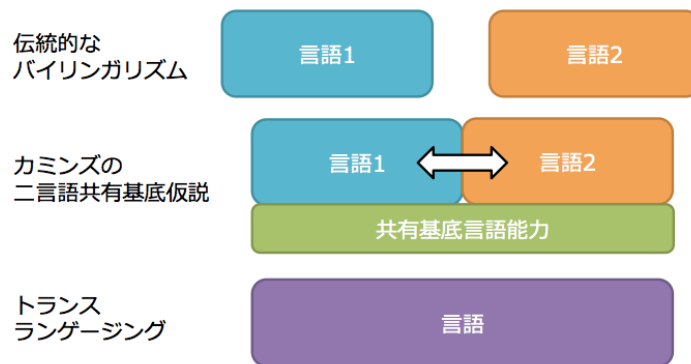
World Japaneses のように現実の多様性を教育に反映させることは今後ますます必要になると考えられるが、コンテキストなどが異なる英語教育における議論をそのまま応用できるものではないことから、日本語教育分野において、独自の議論を発展、深化させることも必要であると考えられる。そこで本稿では、まず World Englishes 及び日本語の多様性についての議論を概観し、それぞれから浮かび上がる疑問を提示する。その上で、大会参加者との議論を手がかりに、多様性を意識した言語と話者に対する理解とは具体的に何を指し、その中で目指されるべき柔軟かつ包括的な言語、文化、社会的理解とは何かを議論することを目的とする。そして、日本というコンテキストへの示唆を提示し、そのような言語／話者観をどのように育成し、教室外へと広げていくことができるのかを検討する足がかりとしたい。

2. 問題意識

本プロジェクトの背景には、日本語によるコミュニケーションについて、これまで当たり前前に捉えられてきた母語話者を中心とした一元的な言語観に疑問を投

げかけ、多様な日本語を認める言語観を育成・促進する必要があるのではないかという問題意識がある。多様な日本語の話者には、日本国内で日本語を使用する人々だけではなく、様々な地域、文化圏で日本語を学んだ日本語学習者も含まれる。これらの多言語話者である日本語学習者にとって、日本語は多様な言語活動の一環であり、彼らが総合的に持っている「言語」自体でもある（García and Wei, 2014 ; 図 1）。

図 1 従来のバイリンガリズムとトランスランゲージングとの違い
(García and Wei, 2014 を基に作成)



こうした多言語話者の言語使用と言語観について理解を深めるためには、単に多言語状況を意識することに留まらず、日本語によるコミュニケーションを社会一般においてより広義に認識することにつなげて行くことが必要であると言える。また、こうした多言語話者を含めた日本語話者それぞれが主体的に発信すること（活動としてのトランスランゲージング）を促進していくことは、言語・文化的な差異に対応できる寛容性を持った社会環境の構築に寄与すると考える。

3. 先行研究

ここでは、上記の目的に照らし合わせ、英語教育と日本語教育分野における言語や言語教育の多様性を強調した先行研究、及び議論を概観し、それぞれから浮かび上がる疑問を提示する。

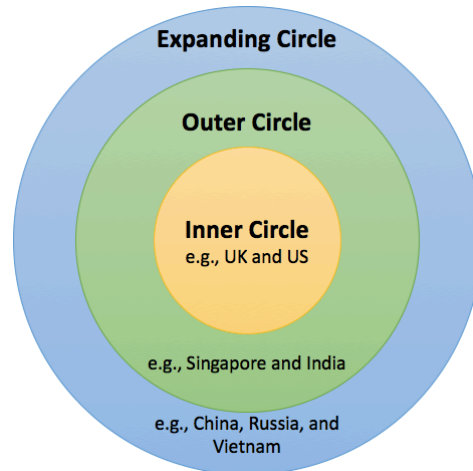
3.1. 英語分野における議論

「World Englishes (WE)」という用語は英語の多様性の記述や分析において「umbrella label」(Bolton, 2004, p.367)として広く使用されている。そのWEに含まれることの多い「English as an International Language (EIL)」や「English as a Lingua Franca (ELF)」も同様に英語使用の世界的な拡大に議論の端を発し、英語の多様性への認識の高まり、またその扱いに関する議論の必要性から生まれた枠組みではあるが、言語やその話者に対する考え方や研究の焦点という点から考えると、WEとはそれぞれに異なるものであることがわかる。

WEという枠組みの中で Kachru (1983) は旧宗主国と旧植民地の関係に焦点を当て、内円 (inner circle)、外円 (outer circle)、拡大円 (expanding circle) からなるサークルモデルを提示した (図 2)。

The spread of English may be viewed in terms of three concentric circles representing the types of spread, the patterns of acquisition and the functional domains in which English is used across cultures and languages. (Kachru, 1985, p.12)

図 2 Circles of English (Crystal, 1995 を基に作成)



WE の議論の中では、特にインドやシンガポールなど外円の国々における英語変種を記述、分析し、それらの英語変種が各地の共通言語としての機能を果たしており、内円の英語変種と同様に、それぞれに正統な英語として捉えるべきであると主張した。

これに対し、EIL (Smith, 1983) は英語という言葉そのものではなく、どのようなコンテキストで何を目的として使用されるのかという点から、国際的に使われる言語としての英語使用に焦点を当てた。

English belongs to the world and every nation which uses it does so with different tone, color, and quality. English is an international auxiliary language. (Smith, 1983, p.1)

その中では、それぞれの英語変種は内円や外円、拡大円といった違いに関係なく平等であり、特に母語話者という存在を基準に考えるのではなく、それぞれの言語変種は使用されるコンテキストにおける社会、文化、教育を反映したものであると考える必要性を説いた。

ELF も EIL と同様に国内での共通語ではなく、国際的な共通語としての英語に焦点を当てている (Jenkins, 2000)。

EFL emphasizes the role of English in communication between speakers from different L1s, i.e. the primary reason for learning English today; it suggests the idea of community as opposed to alienness; it emphasizes that people have something in common rather than their differences; it implies that ‘mixing’

languages is acceptable ... thus that there is nothing inherently wrong in retaining certain characteristics of the L1, such as accent, ..." (Jenkins, 2000, p.11)

EIL と異なる点としては、WE で提示された拡大円における英語の使用について焦点を当ててきた点、それぞれの言語変種の独自性に目を向けるのではなく、Lingua Franca Core と呼ばれる国際的なコミュニケーションにおいて理解を阻害しない共通の項目を明らかにし、コミュニケーションに最低限必要な項目を明示しようとした点が挙げられる。

これら英語の多様性に目を向けた議論は、言語変種に関連しその話者間に存在する様々な不平等に目を向け、母語話者や標準語といった規範に基づいた言語観や言語教育観を批判的に再検討するきっかけとなっている。しかし、それと同時に問題点も指摘されている。WE は旧宗主国であるイギリスとその植民地であった国々の英語の関係性を批判的に捉えることを目的としているため、特に国や地域といったものを基準に議論が行われている。そのため、その中に存在する多様性や話者個人のアイデンティティなどは焦点をされていない。また各国・各地域内での英語変種の使用に焦点が当てられたため、国際的なコミュニケーションにおける使用という面では議論は積極的に行われなかった点も、その限界として挙げられる (McArthur, 1998)。

EIL に関する課題としては、Medgyes (1999) が指摘しているように、特に教育場面において、各地の変種と一般的に標準と言われる英語がどのように扱われるべきかという点が挙げられる。また、教育関係者や学習者の間に存在する標準英語への信仰をどのように乗り越えていくのかといった課題もある。同様に人々の意識に着目したとき、EIL の international という単語が、さも標準英語や母語話者といった規範があると誤った認識を固定化させてしまう危険性も指摘されている (Jenkins, 2007)

最後に ELF は上に述べたように、言語間の共通性に主に焦点を当てていたため、Lingua Franca という言葉が示唆するように多様性や各言語の独自性ではなく、一つの共通語を求めるのではないかという危険性と非母語話者の間のコミュニケーションに特に焦点が当てられたため、英語を母語とする人たちの言語やコミュニケーションに関しては研究の対象とされなかった点が課題として挙げられている (Pakir, 2009)

3.2. 日本語分野における議論

近年、日本語分野においても、地域差や性差といった母語としての日本語内における多様性ではなく、非母語話者との関係性の中での日本語の多様性が論じられるようになってきた。その一つに「やさしい日本語」が挙げられる。やさしい日本語は当初は地域に住む外国人に対しての災害時の対応 (佐藤, 1996) のために考えられたものであるが、現在は災害時以外にもより広く地域における日本語教育というコンテクストで議論がなされている。

より広義のやさしい日本語を考えた際、庵 (2013) は地域の外国人に対しての言語保障という観点から 1) 補償教育の対象としての側面、2) 地域社会における共通言語としての側面、3) 地域型初級の対象としての側面という 3つの性格

があると述べている。その中で、地域におけるコミュニケーションを考えたときに、英語や通常の日本語ではなく、やさしい日本語が現実的な選択肢になることを指摘し、やさしい日本語の多面性は認めつつも、その中で扱う文法項目を提案している。これらに加え、庵（2013）は「日本社会が真の意味での『多文化共生社会』になる」ことを考えたときに、「バイパス」という側面からやさしい日本語の概念を拡張する必要性を述べている。

日本が真の意味で「多文化共生社会」と言えるようになるには、定住外国人が、強い意志を持って頑張れば、日本語母語話者と競争して、日本社会の中で自己実現できる機会が得られるということではなければならないはずである。...「日本社会で自己実現をしたいと考える」人たち...にその機会を言語面から支援する。これがもう1つの意味の「やさしい日本語」の概念である。（庵，2013，pp.7-8）

やさしい日本語という概念の提案は地域における外国人受け入れを考えた際に、コミュニケーションや情報伝達について意識をし、具体的に議論をした上で、受け入れを推し進めていくという点で有用であると言える。しかし、論者が意図しない部分もあると思われるが、日本語教育分野での議論であるため、言語面での議論に焦点が当たってしまっており、結果的にエスニシティやジェンダーといった社会における不平等に関連する他の要因（Pennycook, 2001）を覆い隠し、言語能力の伸長及びその機会さえ保障されれば、日本社会において自己実現ができたり、平等な機会を得ることができたりするという誤った認識を固定化させてしまう危険性がある。また、それと同時に、やさしい日本語はその目的から日本国内の言語的状況に焦点を当てている。そのため、World Englishes や ELF が批判されていたように、日本語母語話者と外国人／日本語非母語話者という集団の二項対立を生み出し、多様性に対する認識ではなく、日本語母語話者を規範とした日本語の変種を作り出し、それぞれの集団を特徴づけ、差異を際立たせるだけにとどまってしまう可能性もあるという点が今後さらなる議論が必要な点であると言える。

4. 考察とまとめ

本節では、大会参加者との議論を手がかりに、多様性を意識した言語と話者に対する理解とは具体的に何を指し、その中で目指されるべき柔軟かつ包括的な言語、文化、社会的理解とは何かを議論することを目的とする。そして、そのような言語／話者観をどのように育成し、教室外へと広げていくことができるのかを検討する。

4.1 World Japaneses の定義

World Japaneses では、その言葉が指すように、日本語という言語を中心に据えた議論を行うことになる。しかし、上記の英語教育及び日本語教育の議論を基に考えると、言語のみに焦点を当てた議論は不十分であり、また新たな規範を作り出す危険性があることを考えると、日本語という言語、そしてその多様性のみで

はなく、話者や目的、コンテキストなどの観点からコミュニケーションをより包括的に捉え、その多様性への理解を高めていく必要があると言える。本稿は日本語という言語を対象にし、またトランスランゲージングという言語能力を捉え直す枠組みから出発した議論ではあるものの、言語的側面に理解を限定してしまうのではなく、コミュニケーション活動に関わる様々な観点における従来の規範から脱却した柔軟な理解を **World Japaneses** として定義する必要がある。

さらに、言語活動の多様性を考える際には、集団のラベルでその内側にある多様性を覆い隠してしまうのではなく、言語活動を行う「個」(細川, 2002)に目を向け、社会における個と個の間で行われる活動として捉える必要があると言える。その際には、**World Englishes/EIL/ELF** の議論で見られたように、結果として母語話者に規範を求めたり、もしくは母語話者性を排除したりするのではなく、母語話者や母語としての日本語に存在する多様性(例: 方言, 役割語, 打ち言葉など)をも含めた、多様な存在としての日本語を考える必要がある。

4.2 World Japaneses が目指すもの

多様性を意識した言語や言語活動、話者に対する理解が目指すものとは何なのだろうか。**World Englishes** ややさしい日本語のように日本国内の居住者という限定されたコミュニケーション活動に焦点を当てた場合、コミュニティの成員として、よりよい社会の形成を最終的な目標とすることも可能であると言える。しかし、**EIL** や **ELF** のように様々な場所、形態、関係性の中で行われるコミュニケーションを想定した場合、そのような具体的な目標は描くことは困難であり、その必要性にも疑問の余地がある。

言語や言語活動、話者に目を向けた場合、その言語活動を構成しているという点から考えると、コミュニケーションにおける平等性に対する意識や気づきが **World Japaneses** が目指すものの一つではないかと考えられる。個と個が対等な関係にあることに気づき、様々な違いに対し寛容な姿勢を持った上で、相手の心情に寄り添い、互いに共有できる部分を探しながらコミュニケーションを遂行することが目指されるべきであると言える。その中では、母語話者/非母語話者、もしくは初級者/上級者といったラベルに関係なく、「個」として言語活動に参加し、対話を通して、互いを理解していくことが求められる。

4.3 多様性への意識の育成

では、言語教育関係者として、どのように教室外における理解促進に寄与することができるのだろうか。まず言語面では、母語話者の多様な発話を含め、様々な話者の言語活動を収集し、言語的多様性への気づきを促し、理解を深められるようなリソースを構築することが挙げられる。また、個への理解促進に関しては、多様な日本語話者の語り、経験を収集し、一般に共有できる形でまとめることが方法として考えられる。

これまでの英語教育及び日本語教育の議論がそうであったように、言語教育という性質を反映して、その理解の対象は言語が中心にあった。また、多くの場合、教育関係者の理解は深まっても、それが積極的に教室外に広げられることは

少なかったと言える。しかし、教室外の社会においても多文化や多言語といった多様性へ注目が集まる中、言語教育関係者として、教室外での理解の促進に主体的に携わっていくことが求められるのではないだろうか。

参考文献

- 庵功雄 (2013) 「『やさしい日本語』研究の現状と今後の課題」『一橋日本語教育研究』2, 1-12
- 加納なおみ (2015) 「Translanguaging strategies developed by multilingual students in a Japanese graduate program」日本におけるトランス・ランゲージング研究 中間報告会発表資料
- 菅野康子 (2014) 「Identity and language education: Are there such things as “World Japaneses”」カナダ日本語教育振興会 2014 年年次大会基調講演資料
- 佐藤和之 (1996) 「外国人のための災害時のことば」『月刊言語』25 (2) , 94-101 大修書店
- 細川英雄 (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- Bolton, Kingsley. (2004). World Englishes. In A. Davies & C. Elder (eds.), *The handbook of applied linguistics*, 367-396. Oxford: Blackwell.
- Crystal, David. (1995). *The Cambridge encyclopedia of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- García, Ofelia, & Wei, Li. (2014). *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. New York: Palgrave Macmillan.
- Jenkins, Jennifer. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, Jennifer. (2007). *English as a Lingua Franca: Attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, Barj B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle. In R. Quirk and H. G. Widdowson (eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures*, 1-30. Cambridge: Cambridge University Press.
- McArthur, Tom. (1998). *The English languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Medgyes, Péter. (1999). Language training: A neglected area in teacher education. In G. Braine (ed.), *Non-native educators in English language teaching* 179-198. Mahwah: Lawrence Erlbaum.
- Pakir, Anne. (2009). English as a lingua franca: Analyzing research frameworks in international English, world Englishes, and ELF. *World Englishes* 28(2), 224-235.
- Pennycook, Alastair. (2001). *Critical applied linguistics: A critical introduction*. Mahwah: Erlbaum Associates.
- Smith, Larry. (1983). *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon Press.